

筑後西部地区遺跡群

福岡県筑後市大字井田、島田、古島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書 第15集

1995

筑後市教育委員会

ちくごせいぶちく
筑後西部地区遺跡群

県営干拓地等農地整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

筑後市教育委員会

序

この度報告致します筑後西部地区遺跡群の埋蔵文化財発掘調査地区となりました井田、島田、古島地区の周辺には、過去の分布調査によつて弥生時代の土器が散布する地帯として、遺跡の所在は明らかにされていました。

筑後市教育委員会では、この3地区の県営干拓地等農地整備事業に係る筑後西部地区工事に伴う筑後西部地区遺跡群発掘調査を、福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受けて、平成5年度及び平成6年度に実施し、この度報告することになりました。

本報告書が、地域の学術研究や郷土研究、文化財の保護・啓発の一助として広く活用していただければ幸いであります。

最後に、調査に際しましては、福岡県筑後川水系農地開発事務所並びに筑後西部土地改良区、地元区民の方々を始め、猛暑の中、連日調査に参加されました作業員の方々に厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成7年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 森 田 基 之

例　　言

1. 本書は、県営干拓地等農地整備事業に係る筑後西部地区の工事に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受けて、筑後市教育委員会が平成5年度及び平成6年度に実施した筑後西部地区遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査に係る費用は、総額の一部を国及び県から補助を受け、残る75%を福岡県筑後川水系農地開発事務所が負担し、更に地元負担分である25%を筑後市が負担した。
3. 検出遺構の実測は小林勇作、大島真一郎、奥村太郎、遺構写真撮影は小林、大島が担当し、上空からの空中写真については（有）空中写真企画に委託し、出土遺物の実測は平塚あけみ、遺物写真撮影は小林が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 「島田三反田遺跡」及び「古島島相遺跡」で検出した遺構測量は朝日航洋株式会社に委託した。
5. 本書に示す方位はすべて座標北を指す。
6. 本書に使用した遺構の表示は下記の略号に拠る。
SB—掘立柱建物 SD—溝・堀 SK—土壙 SP—ピット SX—不明遺構
7. 本書に掲載した陶磁器の分類は、横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集4』1978年によっている。
8. 本書の執筆・編集は小林が担当した。

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	1
第2節 地理的歴史的環境	2
第2章 井田西中野遺跡の調査	9
第1節 はじめに	9
第2節 検出遺構	9
第3節 出土遺物	9
第4節 小結	9
第3章 島田三反田遺跡の調査	12
第1節 はじめに	12
第2節 検出遺構	12
第3節 出土遺物	18
第4節 小結	18
第4章 古島島相遺跡の調査	22
第1節 はじめに	22
第2節 検出遺構	22
第3節 出土遺物	25
第4節 小結	26
第5章 まとめ	27

挿図目次

第 1 図	周辺の遺跡分布図 (1/25000)	3
第 2 図	井田西中野遺跡調査地点位置図 (1/2500)	6
第 3 図	井田西中野遺跡遺構配置図 (1/200)	7・8
第 4 図	SD 1 土層断面実測図 (1/40)	10
第 5 図	SD 2 土層断面実測図 (1/40)	10
第 6 図	石器実測図 (1/2)	10
第 7 図	島田三反田遺跡調査地点位置図 (1/2500)	13
第 8 図	島田三反田遺跡遺構配置図 (1/400)	14
第 9 図	土壤実測図① (1/50)	15
第 10 図	土壤実測図② (1/50)	17
第 11 図	溝出土土器実測図 (1/3)	18
第 12 図	古島島相遺跡調査地点位置図 (1/2500)	20
第 13 図	古島島相遺跡遺構配置図 (1/500)	21
第 14 図	SK 05 実測図 (1/30)	22
第 15 図	SK 10・SK 20 実測図 (1/50)	23
第 16 図	SK 10・SK 20 土層断面実測図 (1/40)	23
第 17 図	土壤実測図 (1/50)	24
第 18 図	土壤出土土器実測図 (1/3)	26

図版目次

- 図版 1 ①井田西中野遺跡全景（南から）
②井田西中野遺跡全景（北から）
- 図版 2 ①井田西中野遺跡 SD 1（東から）
②井田西中野遺跡 SD 1 土層断面（南から）
- 図版 3 ①井田西中野遺跡 SD 2 土層断面（南から）
②井田西中野遺跡表土採集石礫
- 図版 4 ①島田三反田遺跡全景（西から）
②島田三反田遺跡 SD 10（南西から）
- 図版 5 ①島田三反田遺跡土壤群（南から）
②島田三反田遺跡土壤群（南から）
- 図版 6 ①島田三反田遺跡 SD 11（南から）
②島田三反田遺跡 SD 11 出土遺物
- 図版 7 ①古島島相遺跡調査区東部全景（西から）
②古島島相遺跡調査区北部全景（南から）
- 図版 8 ①古島島相遺跡調査区南部全景（北から）
②古島島相遺跡 SK 05 遺物出土状況（北から）
- 図版 9 ①古島島相遺跡 SK 10 土層断面（南から）
②古島島相遺跡 SK 20 土層断面（西から）
- 図版 10 古島島相遺跡出土遺物

第1章 序説

第1節 調査の経過

筑後市は平坦な土地を利用して古くから水田地帯として、稲作が盛んに行われてきた場所である。筑後市の西部にあたるこの地域でも、米、麦を中心の二毛作穀倉地帯として農業が行われ、近年では農業構造の改善に伴い、蔬菜ハウス園芸が導入されるなど農業経営の多様化の傾向がでてきた。また、この地域は筑後川下流特有の用排水兼用のクリークが迷走しており、道路の狭小、排水不良を起こすなど農業近代化の課外要因とされてきた。

こうした状況の中、筑後市でも耕地の集団化、大区画整理、農道の整備、用排水路の分離など農地を確立させるため、平成2年度から農地整備事業が実施されるようになった。

平成5年度及び平成6年度に実施した筑後西部地区遺跡群の発掘調査は、これに絡む県営干拓地等農地整備事業筑後西部地区的平成5年度及び平成6年度工事予定地で行われたもので、各遺跡の調査に至るまでの経過は次の通りである。

＜井田西中野遺跡：平成5年度調査＞

平成5年5月、福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会へ予定地内埋蔵文化財の確認依頼があった。筑後市教育委員会ではこれを受け、同年6月に試掘調査を実施し、工事予定地内に埋蔵文化財が認められた事を事業関係者に回答し協議を行った。協議の結果、「筑後西部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ支線用排水路工事予定地を調査することとなった。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県からの一部補助を受け、受益者負担分については文化財担当部局で負担し、残る費用については水系事務所にて準備することで合意した。

調査は、平成5年11月から実施し、同月には調査を終了し、遺物の整理および報告書作成は筑後市役所内文化財整理室にて行った。

＜島田三反田遺跡・古島島相遺跡：平成6年度調査＞

平成6年5月、福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会へ、予定地内埋蔵文化財の確認依頼があった。筑後市教育委員会ではこれを受け、同年6月に試掘調査を実施し、工事予定地内に埋蔵文化財が認められた事を事業関係者に回答し協議を行った。協議の結果、「筑後西部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ支線用排水路工事予定地を調査することとなった。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県からの一部補助を受け、受益者負担分については文化財担当部局で負担し、残る費用については水系事務所にて準備することで合意した。

調査は、平成6年9月に「島田三反田遺跡」、10月から「古島島相遺跡」を実施し、12月には調査を終了した。遺物の整理および報告書作成は筑後市役所内文化財整理室にて行った。

発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

1) 調査主体

筑後市教育委員会

2) 総括

教育長	森田 基之	技師	永見 秀徳
教育部長	津留 忠義	小林 勇作 (調査担当)	
社会教育課長	下川 雅晴	塚本 映子 (嘱託 H.6.7.1~)	
社会教育係長	松永 盛四郎		

3) 発掘調査参加者 (順不同、敬称略)

大島真一郎 (調査補助員)	愛川 一枝	今村 鈴子	太田黒三枝	大石 新一
奥村 太郎	小野 清次	小野ミノブ	加藤 礼子	蒲池 京子
古賀 妙子	下川 彰	下川 幸子	下川 玉枝	下川チツコ
田川 孝枝	田島 好江	壇 ちえ子	中沢 やよい	野田 洋子
深町 順子	矢次 和枝	吉田喜美子	吉田フサコ	吉田 裕

4) 整理作業参加者 (順不同、敬称略)

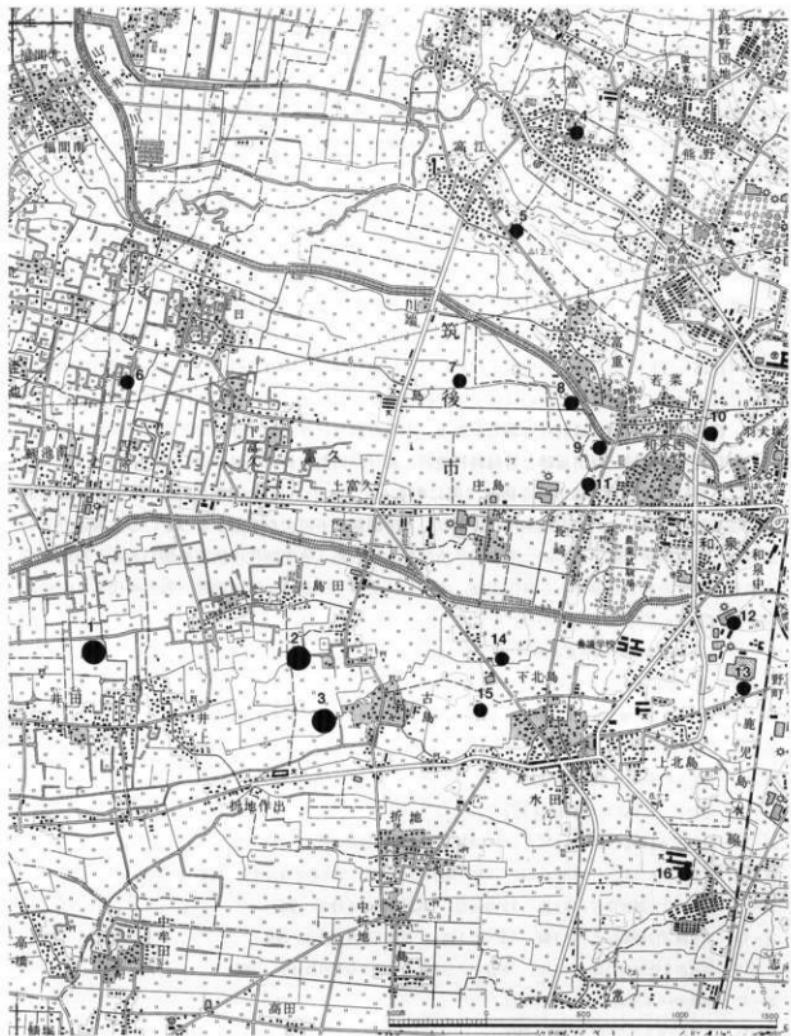
平塚あけみ (整理補助員)	大島真一郎	奥村 太郎	桜木 千鶴	野間口靖子
野田 洋子	馬場 敦子	深川 善子	湊 まど香	

第2節 地理的歴史的環境

筑後市を地理的環境から概観すると北の背振山、東の耳納山、西の有明海、南の筑肥山地に囲まれた筑後平野のはば中央に位置する。北は九州背振山系の麓、筑後平野が広がり、東は筑後川の南に東西に延びる耳納山系、南は筑肥山系に囲まれる。耳納山系の南端巣野から派生する丘陵(八女丘陵)は筑後市の北東部に広がり、標高 15~30 m の八ツ手状に延びる起状に富んだ地形をなす。これより南は低位段丘、西は標高 5 m 位の低湿地帯へと移行する。

筑後市の中心街として脇わう羽犬塚は、縦断する 209 号およびJR 鹿児島本線と横断する国道 442 号とがちょうど交差する辺りで、周囲は旧街道の宿場町として江戸時代から繁栄した地区もある。産業では機械化の進んだ水田農業、酪農、梨、葡萄といった特色のある農業を主体とし、久留米耕や手すき和紙といった家内工業や機械、食品といった工業が中心となり、農業と工業が調和のとれた都市となっている。筑後市を代表する河川で、一級河川の矢部川が南端に西流する。この矢部川では、ゲンジ蟹の生息地として国の天然記念物の指定地域になっており、毎年 5 月下旬から 6 月初頭まで蟹を観測することができる。また、この地域は本市の観光拠点であり、脇わう船小屋温泉郷は江戸時代からの湯治場として有名である。この他、矢部川から分岐して、市の中央を流れる山ノ井川や江戸時代の人工河川とされる花宗川などが筑後市の農業を支えている。

こういった地理的環境のなか、本市では過去に数多くの遺跡が発見されており、現在でも遺跡の確認や調査が進められている。市内に点在する遺跡には、主として縄文時代から近世までの集落跡や散布地などがあり、これらを時代的に概観していくことにする。縄文時代の遺跡としては、坊田遺跡、空山遺跡、石塚遺跡、裏山遺跡などが挙げられる。前者の 3 遺跡は散布地として確認されて



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25000)

- | | | | |
|------------|--------------|-------------|------------|
| 1. 井田西中野遺跡 | 2. 島田三反田遺跡 | 3. 古島島相遺跡 | 4. 久富鳥居遺跡 |
| 5. 高江遺跡 | 6. 四ヶ所古四ヶ所遺跡 | 7. 若菜立萩遺跡 | 8. 若菜田中前遺跡 |
| 9. 若菜湖ノ江遺跡 | 10. 若菜遺跡 | 11. 坊田遺跡 | 12. 井原口遺跡 |
| 13. 狐塚遺跡 | 14. 久清遺跡 | 15. 下北島桜崎遺跡 | 16. 山伏遺跡 |

おり、縄文～弥生時代の複合遺跡として、裏山遺跡では1966年の調査で住居跡・押型文土器・石器などを確認し、鶴田岸添遺跡では落し穴や堅穴住居、焼失住居などを調査によって発見している。^{註-3}

弥生時代では、板付^式・夜臼^式～須須式土器を出土した常用遺跡や板付式土器や亀^ノ甲式土器の形態を引き継ぐ平塚遺跡、集落跡として多数の土壤を検出した梅島遺跡などが挙げられ、弥生～古墳時代の複合遺跡で多くの堅穴住居跡を検出した蔵敷森^ノ木遺跡など、市内のほとんど全域に点在していることが窺える。^{註-4}

北東部に広がる八女丘陵上では武装石人として有名な前方後円墳の石人山古墳や造出しを付設している欠塚古墳（前方後円墳：平成6年度古墳整備終了）、堅穴系横口式石室で形象埴輪や馬具を出土した瑞王寺古墳（円墳：消滅）などが点在する。^{註-5}

平安・奈良時代の遺跡で、集落跡である前津中の玉遺跡からは堅穴住居跡を確認し、縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である若菜遺跡からは、ほとんどに竈を付設する堅穴住居跡を約400軒あまり検出している。また、古代官道である「西海道」跡とされる遺構を鶴田市ノ塚遺跡で確認することによって、学術研究で市のほぼ中央を縱断すると推定された官道の存在を裏づけた遺跡となつた。鶴田市ノ塚遺跡では現在も調査が進み、中世の掘立柱建物跡や井戸などを多数検出している。^{註-6}

今回報告する島田三反田遺跡と古島島相遺跡、及び井田西中野遺跡は本市の西部、花宗川の南に位置し、遺跡の所在は過去の分布調査で既に明らかであった。遺跡の周辺には、標高5m未満の低湿地帯特有のクリークが縱横無尽に広がり、水田農耕に不可欠な水路となっている。周辺の主な遺跡は近世の集落遺跡である四ヶ所古四ヶ所遺跡をはじめ、弥生時代の集落遺跡である久清遺跡や古墳から中世の複合遺跡である高江遺跡、中世の区画溝を確認した坊田遺跡、弥生時代から中世の複合遺跡である桜崎遺跡などが挙げられる。^{註-7}

註-1 平成3年度調査

註-2 「裏山遺跡」 筑後市教育委員会 1966

註-3 筑後市文化財報告書 第12集 「筑後東部地区遺跡群Ⅰ」 筑後市教育委員会 1994

註-4 「狐塚遺跡」 筑後市教育委員会 1970

註-5 平成3年度調査

註-6 平成2・3年度調査

註-7 筑後市文化財報告書 第6集 「蔵敷遺跡群」 筑後市教育委員会 1990

註-8 <郷土の文化財2> 国指定史跡 八女古墳群石人山古墳 広川町教育委員会 1995

註-9 筑後市文化財報告書 第8集 「欠塚古墳」 筑後市教育委員会 1993

註-10 筑後市文化財報告書 第3集 「瑞王寺古墳」 筑後市教育委員会 1984

註-11 筑後市文化財報告書 第4集 「前津中の玉遺跡」 筑後市教育委員会 1987

註-12 平成4～6年度調査

註-13 平成5・6年度調査

註-14 筑後市文化財報告書 第10集 「四ヶ所古四ヶ所遺跡」 筑後市教育委員会 1994

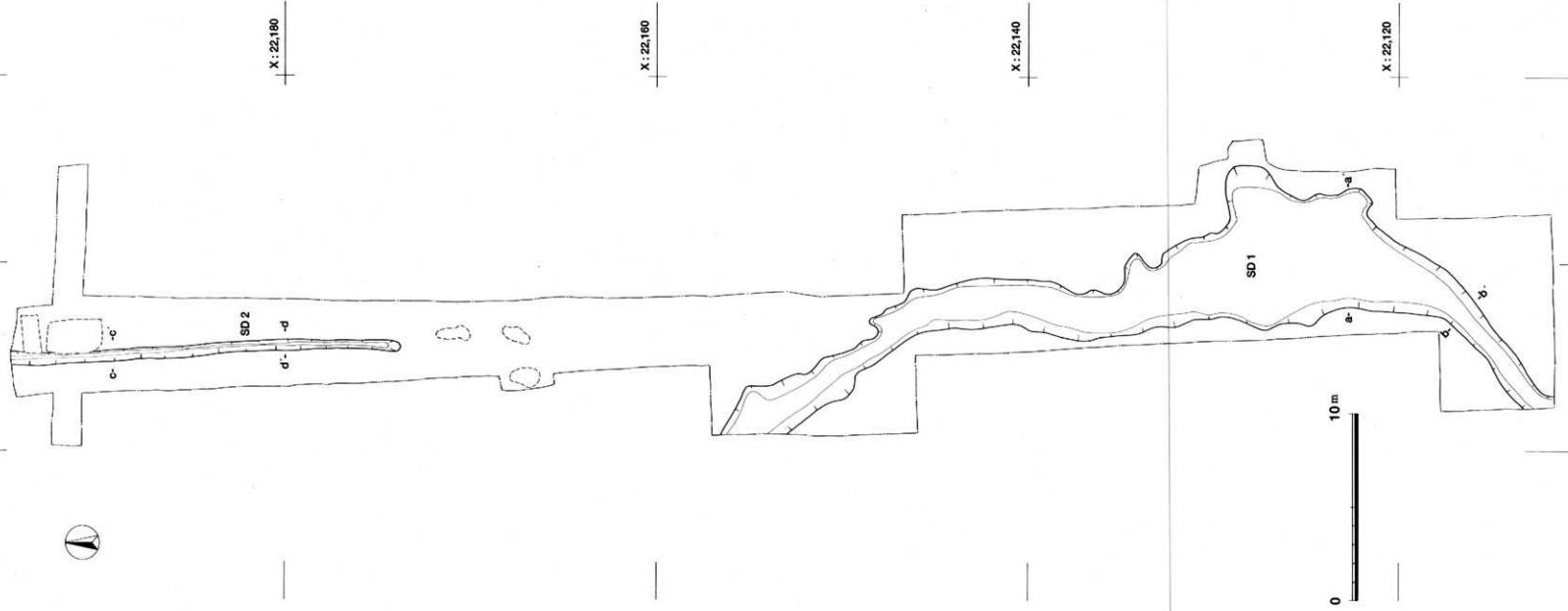
註-15 筑後市文化財報告書 第7集 「高江遺跡」 筑後市教育委員会 1991

註-16 筑後市文化財報告書 第9集 「桜崎遺跡」 筑後市教育委員会 1993

井田西中野遺跡



第2図 井田西中野遺跡調査地点位置図 (1/2500)



第3図 井田西中野漁游査査配図 (1/200)

X: 22,160
Y: -50,180

X: 22,140
Y: -50,160

第2章 井田西中野遺跡の調査

第1節 はじめに

井田西中野遺跡は、花宗川の南約400mの地点の標高5m未満の低湿地帯上に位置し、筑後市大字井田字西中野1457-1番地ほか2筆に所在する。調査区の西側は隣町である大木町で、周辺はこの地域特有のクリークが迷走状に広がり、水田などの農耕が盛んな所である。平成5年10月に農地整備地区的試掘調査を行い、掘削の及ぶ支線用排水路設置部を調査することになった。東西約10m、南北83m、調査面積671m²を調査範囲として設定し、同年11月15日から11月29日までの約1ヶ月間に亘って発掘調査を実施した。調査は、重機による表土及び包含層の除去、遺構の検出、掘削、個別実測、写真撮影などを行い、同年11月25日に調査区全体の写真撮影を実施し、調査を終了した。遺構は乳白色粘土の地山面で、緩やかに曲がる溝やピットを検出し、土師器、陶磁器、石器など極少量の出土遺物を得た。なお、低湿地帯での調査のなか雨天が続いたことも重なり、調査困難な状況下で作業は行われた。

以下、検出した遺構や出土遺物について報告する。

第2節 検出遺構

SD1 (第3・4図・図版1-①・2-①・2-②)

検出の長さ613m、幅178cm、遺構検出面からの深さ17~25cmを測る。調査区西側の区画を取巻くように検出され、溝の東側に一部突出した部分を認める。堆積土は灰色粘質土で、砂層は観られなかつた。埋土からの遺物は、土師器の土鍋細片を僅かに認めただけである。

SD2 (第3・5図・図版1-②・3-①)

調査区の北端から、南北に延びる溝を20.3m検出し、上幅30~60cm、下幅20~22cm、遺構面からの深さは45cm程度を測る。溝の底面は平らで高低はやや南へ低く、内部には段を有する。堆積土は段上の層で黒灰色粘質土、段下の層では黒色砂質土が堆積をなし、流水路としての活用を考える。埋土からの出土遺物はない。

第3節 出土遺物

検出遺構からの遺物は、微量かつ細片であるためここでの詳細は省くが⁵、出土遺物はこの他、包含層から土師器片12点、陶器1点、白磁1点、石器1点をそれぞれ認める。このうち、ほぼ完型である石器について記すことにする。

表土

石器 (第6図・図版3-②)

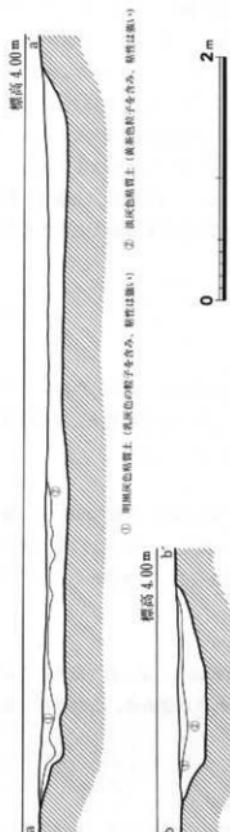
石器 (I) 基部に抉入のある凹基無茎鍬で長二等辺三角形状に刃部が尖る。未完成品で、石材は片岩である。

第4節 小結

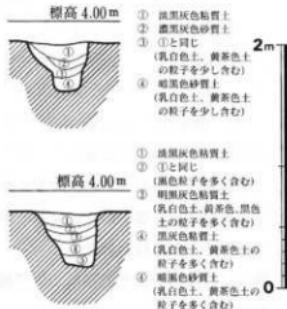
調査区の西側を取巻くように検出したSD1からの出土遺物は、土師器土鍋の体部細片を僅かに出土しているにすぎず、また、遺構付近の包含層からは白磁片を採集していることから、中世の遺構と比定する。しかしながら遺物は皆無に近い状況であり、年代を特定するのは極めて危険すぎると考える。またSD2についても同じく、出土遺物に恵まれていないために時期決定には至っていない。

表土・包含層からの出土遺物では土師器や近世陶器などを採集しているなど、検出した遺構は近世までくだる可能性もありうる。

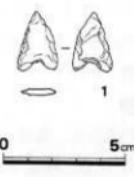
は場整備事業に伴い、次年度に周辺地域の調査を予定していることもあり、今後の調査成果をもとに再検討の余地がある。



第4図 SD 1 土層断面実測図 (1/40)



第5図 SD 2 土層断面実測図 (1/40)



第6図 石器実測図 (1/2)

島田三反田遺跡

第3章 島田三反田遺跡の調査

第1節 はじめに

島田三反田遺跡は、筑後市大字島田字三反田 82-1 番地ほか5筆に所在する。標高 5m 未満の低湿地帯上にあり、周囲はクリークに囲まれ、調査前の現状は水田として利用されていた。当遺跡は、以前から周知されていた古島遺跡の北方約 100m 地点の周辺遺跡となり、今回の農地整備にあたり支線用排水路設置範囲のうち東西 100m、南北 13.6m の調査面積 1360m²を調査範囲として設定した。調査は、平成 6 年 9 月 16 日から 12 月 6 日までの約 3 ヶ月間に亘って実施し、この間、重機による表土と深土の除去、遺構の検出や掘削、個別実測、写真撮影などを行った。同年 11 月 22 日には調査区内の遺構実測をラジコンヘリコプターによる航空測量にて実施した。遺構は乳白色粘質土の地山に土壤群や溝、ピットを検出し、出土遺物は弥生土器、土師器、陶磁器等を認めた。

以下、それぞれの遺構や遺物について報告する。

第2節 検出遺構

土壤

調査区の西側からまとまった土壤群が検出されたが、プランはほとんどが梢円形を呈する。既に、かなりの削平を受けていたためか、出土遺物は皆無に近い状態であった。このため遺構の性格や時期については不明なものが多い。

SK 01 (第9図・図版3)

梢円形の平面プランで底面はフラットである。黒色の粘質土が堆積し、長径 150cm、短径 110cm、深さ 9~14cm を測る。土師器片をわずかに認めた。

SK 03 (第9図・図版3)

梢円形で、幅 50cm 程度の土壤である。黒色の粘質土が堆積し、磨滅した土師器片をわずかに認めた。

SK 05 (第9図・図版3)

径は 70cm 前後の梢円形の土壤で、土師器片をわずかに認めた。埋土は黒色粘質土。

SK 06 (第9図・図版3)

一部、溝状の搅乱を受けた隅丸方形の土壤で、黒茶色粘質土の堆積をなしていた。かなり磨滅した土師器片が出土した。

SK 07 (第9図・図版3)

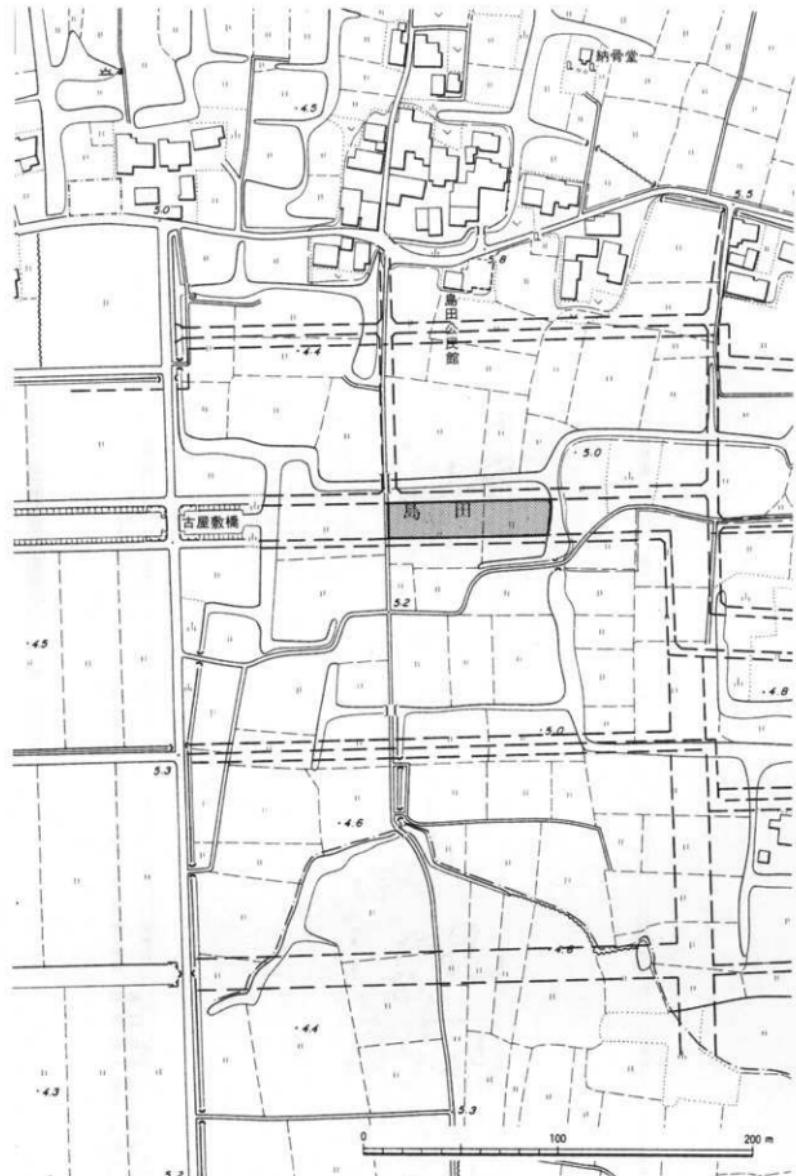
平面プランは梢円形を呈し、長径 240cm、短径 150cm を測る。かなりの削平を受け、埋土は单一の黒茶色粘質土であった。磨滅した弥生土器、土師器がわずかに出土した。

SK 08 (第8図・図版3)

ほぼ円形を呈し、黒色の单一埋土である。土師器片を出土する。

SK 09 (第9図・図版3)

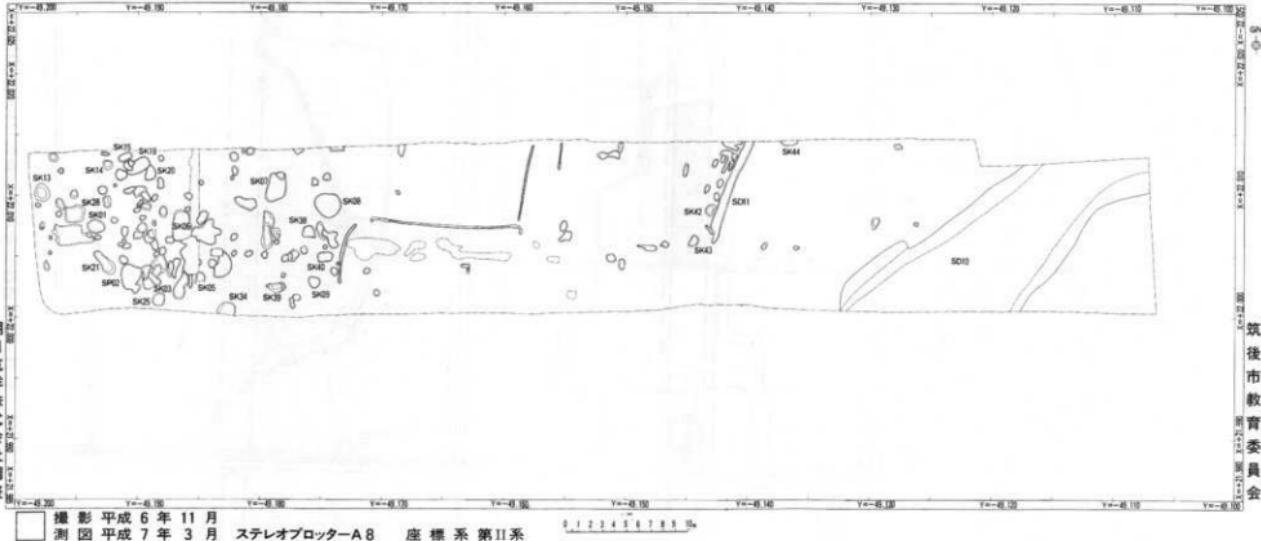
梢円形をした径 100cm の土壤で、黒色の单一土層を呈す。土師器細片を出土した。



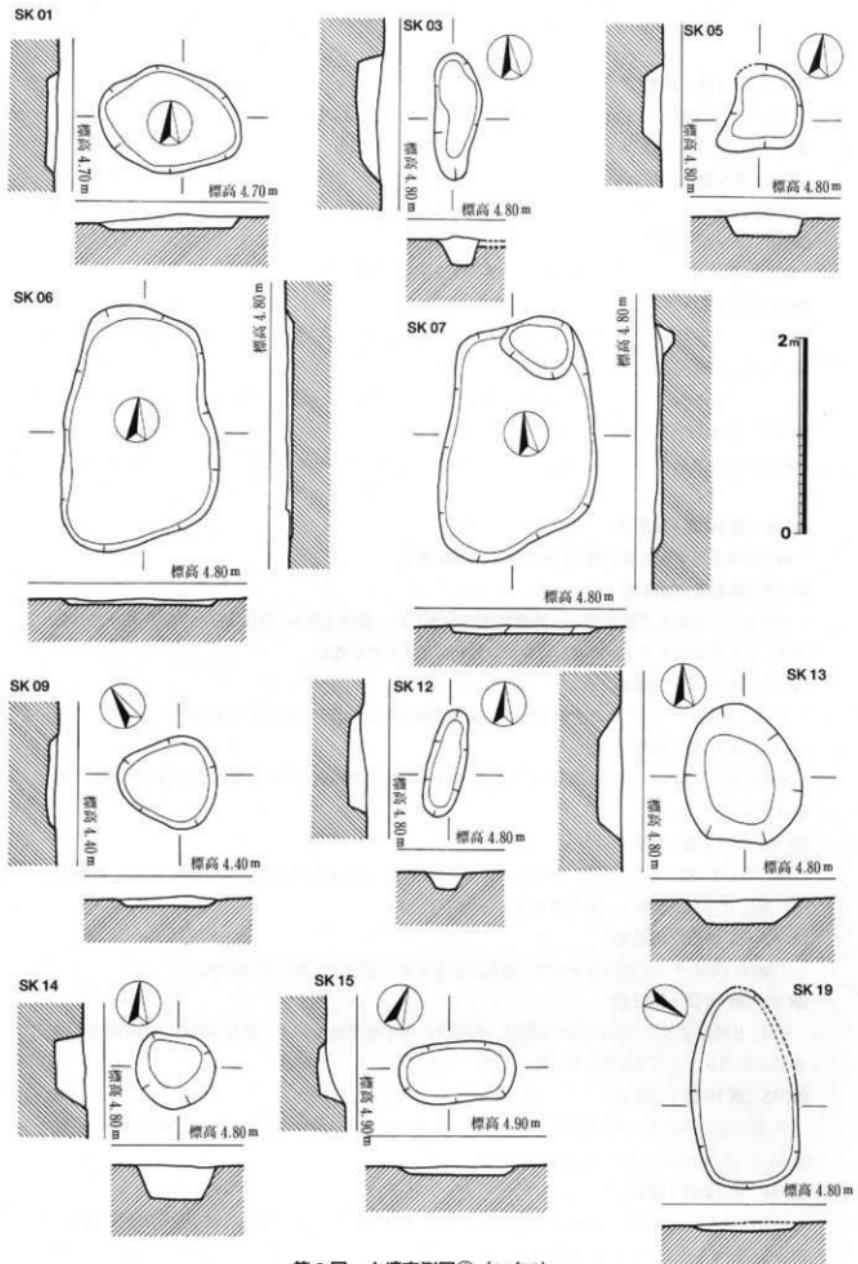
第7図 島田三反田遺跡調査地点位置図 (1/2500)

-14-

朝日新闻社式会社調査



第8図 島田三反田遺跡遺構配置図(1/400)



第9図 土壌実測図① (1/50)

SK 13 (第9図・図版3)

平面プランは梢円形を呈し、長径142cm、短径120cm、深さ24cmを測る。埋土は单一の淡黒茶色粘質土で、出土遺物はない。

SK 14 (第9図・図版3)

ほぼ円形をした土壤で、埋土は淡黒茶色粘質土の单一土であった。出土遺物なし。

SK 15 (第9図・図版3)

削平によってわずかに残った土壤で、埋土は淡黒茶色粘質土であった。

SK 19 (第9図・図版3)

同じく、削平によってわずかに残った土壤で、底面はフラットである。

SK 20 (第8図・図版3)

SK 19に切られる梢円形を呈すもので、埋土は黒色土であった。出土遺物はない。

SK 21 (第10図・図版3)

梢円形を呈する土壤で、黒茶色粘質土の埋土である。長径230cm、短径70cm、深さ25cm程度を測る。

SK 25 (第10図・図版3)

梢円形状を呈する土壤で幅110cm、深さ20cmを測る。

SK 28 (第8図・図版3)

平面プランは隅丸方形を呈し、底面は凹凸が著しい。長径160cm、短径130cm、深さ36~39cmを測り、やや粘質の黒色土が堆積していた。遺物は出土していない。

SK 34 (第10図・図版3)

調査区の南端から出土した土壤である。出土遺物はなく、黒色の堆積土であった。

SK 38 (第10図・図版3)

黒色粘質土の堆積からなる隅丸方形形状を呈する土壤で、幅100cm前後、深さ15cm前後を測る。底面はほぼ平坦である。

SK 39 (第10図・図版3)

SK 38の南で検出した土壤で、東西にテラスを有する。黒色粘質土の埋土で、長径162cm、短径73cm、深さ15~22cmを測る。出土遺物はない。

SK 40 (第10図・図版3)

土壤群の東よりに位置するもので、隅丸方形を呈す。遺物は出土していない。

SK 42 (第10図・図版6)

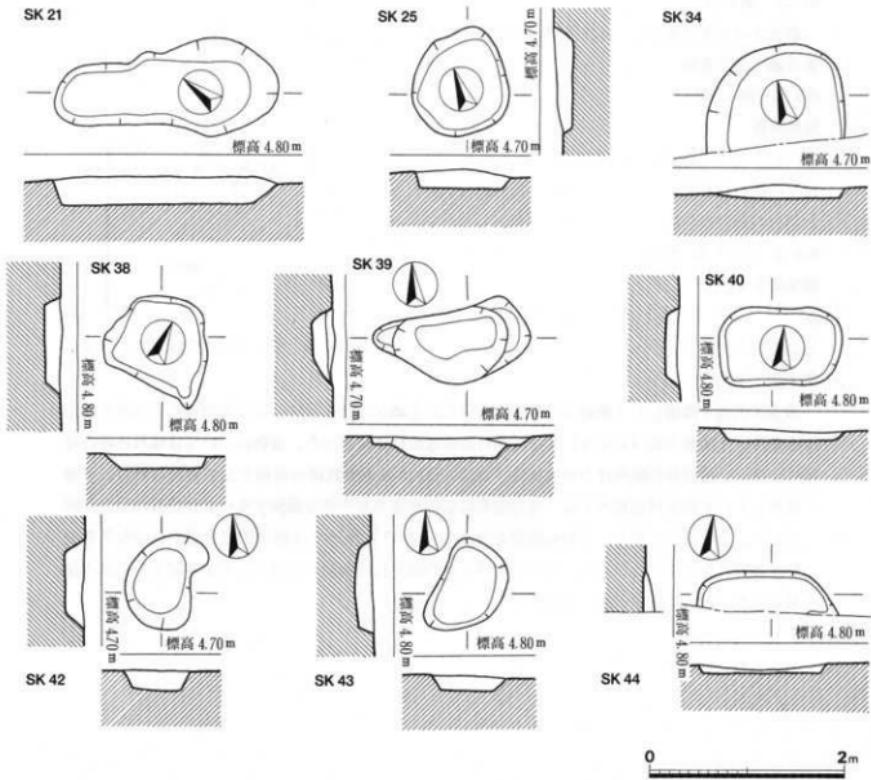
SD 11と隣接するほぼ梢円形の土壤で、かなりの削平を受けている。長径100cm、短径69cm、深さ19cmを測り、出土遺物はなかった。

SK 43 (第10図・図版6)

SK 42の南で検出した梢円形の土壤である。遺構はかなりの削平を受けており、長径102cm、短径63cm、深さ14cmを測る。出土遺物はない。

SK 44 (第10図・図版6)

調査区の北東で検出し、遺構の半分を掘下げた。埋土は黒色粘質土で、長径140cm、短径40cm、深さ3~10cmを測る。出土遺物はない。



第10図 土壌実測図② (1/50)

溝

SD 10 (第8図・図版4-②)

調査区の東端に検出したもので、周囲の状況から旧クリーク跡と考えられる。上幅は約10mで、断面は緩やかにU字状を呈する。上層は茶褐色土の堆積をしており、下層に至つては自然堆積の暗黒灰色粘質土であった。遺物はわずかに土師器の蓋を出土したに留まった。

SD 11 (第8図・図版6-①)

南北に延びる上幅70cm前後の溝で、8.9m検出した。かなりの削平を受け、弥生土器、土師器、陶磁器など数点を出土した。埋土は灰茶色土の单一土であった。

その他の遺構

SP 02 (第8図)

調査区の西側で検出し、弥生土器、土師器をわずかに認めた。埋土は黒色粘質土。

第3節 出土遺物

SD 10 (第11図)

施釉陶器

蓋 (3) 復原口径 8.7cm、復原高 3.5cm を測り、胎土はきめ細かく乳茶褐色である。外面に乳白色の化粧土と飴色の透明釉を施す。

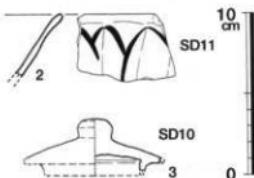
SD 11 (第11図・図版6)

龍泉窯系青磁

碗 (2) かなり風化しており、乳灰色の胎土に青緑色の釉を施す。I-5-b。

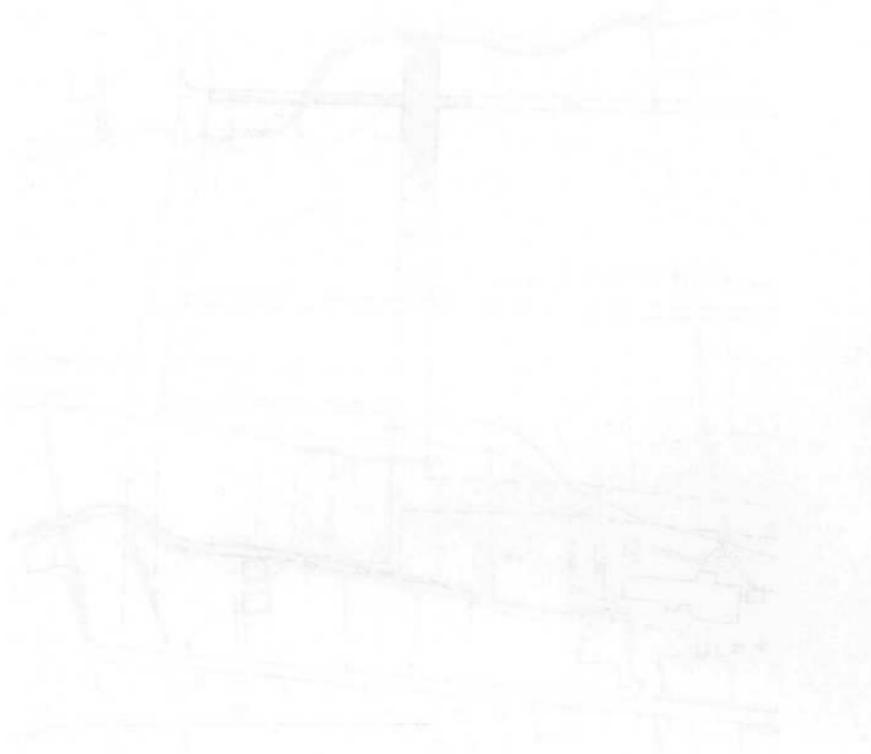
第4節 小結

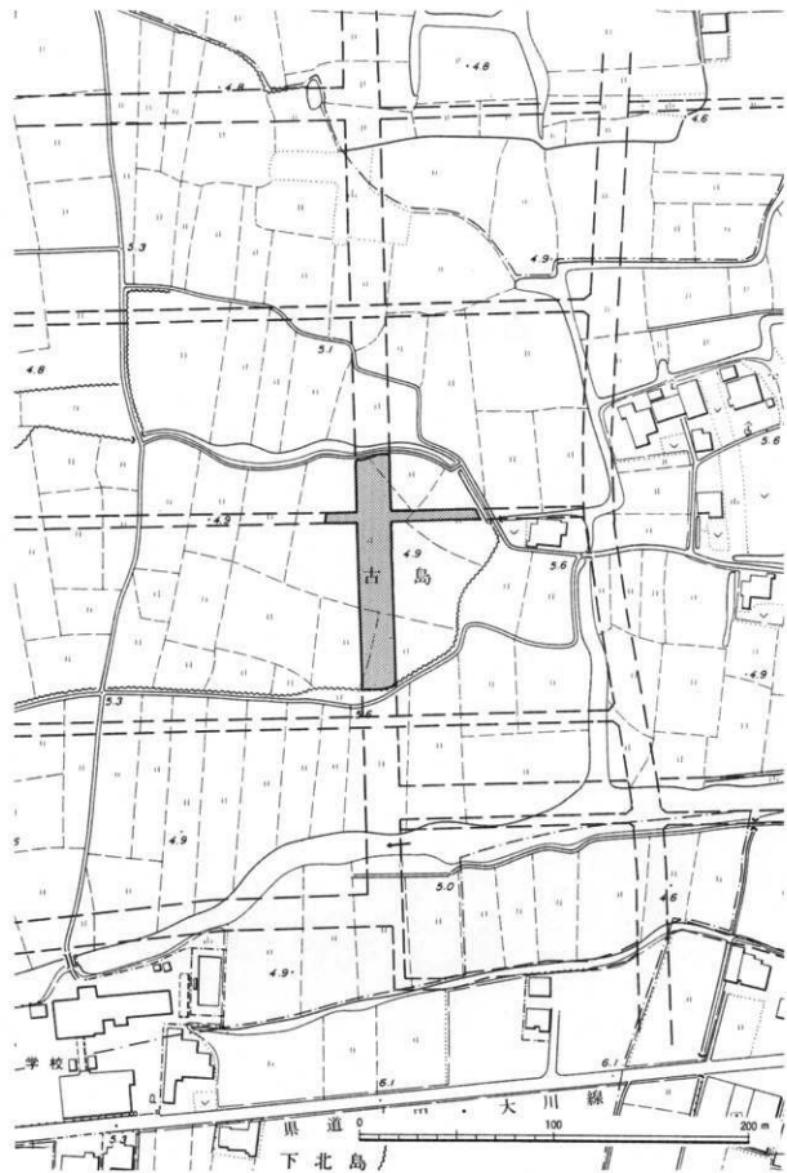
調査区西側で確認した土壤群は自然埋土を呈した土壤がほとんどで、出土遺物は弥生土器片や須恵器片、土師器小皿（糸切り）片を僅かに認めるだけに留まった。遺物については流れ込みの可能性が高く、最終埋没時期は中世に比定される。SD 10 は近世以降の流路として考えられる。下層に堆積していた暗黒灰色粘質土は、周辺地形に見られるクリークに堆積するヘドロ特有の匂いが漂っており、旧クリーク跡としての可能性を考える。SD 11 に至っては龍泉窯系青磁や白磁などを出土しており、中世に比定できる。ただ、古伊万里の碗や近世陶器片が出土しており調査時の混入品と捉えるが、近世に下る可能性もある。



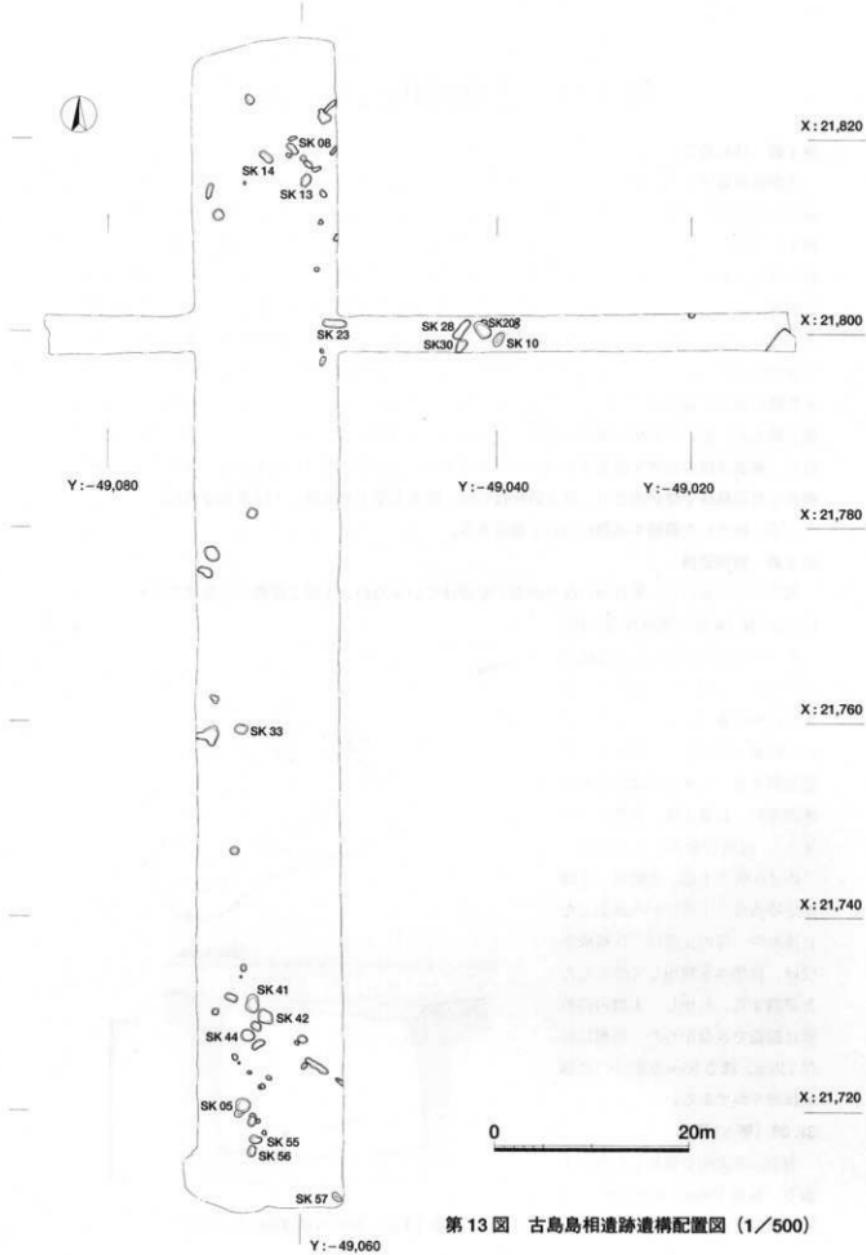
第11図 溝出土土器実測図 (1/3)

古島島相遺跡





第12図 古島島相遺跡調査地点位置図 (1/2500)



第13図 古島島相遺跡遺構配置図 (1/500)

第4章 古島島相遺跡の調査

第1節 はじめに

古島島相遺跡は、筑後市大字古島字島相135番地ほか5筆に所在し、周囲はクリークが広がる標高5m未満の低湿地帯である。遺跡の所在は以前からの分布調査によって、弥生時代の遺物散布地として明らかで、周辺に至つても遺物が認められるため、当初、遺跡の範囲は広範囲に広がるものと考えられた。平成6年6月18日から試掘調査を実施したところ、当該地は丘陵の起伏が激しい場所であることがわかり、また、戦後間もない頃に学校改築のため大掛かりな削平工事を施していることが、地元住民の話や試掘調査の結果から窺うことができた。この試掘結果を基に、掘削の及ぶ支線用排水路のうち調査面積1920m²を調査範囲とし、平成6年9月17日から12月6日までの約3ヶ月間に亘って調査を実施した。厚さ15cm程の表土と10~50cm程の包含層（黄白色粘質土）を重機で除去し、続いて遺構の検出や掘削、個別実測、写真撮影などを行つた。この間、同年11月22日に、調査区内の遺構実測をラジコンヘリコプターによる航空測量にて実施し、調査を終了した。検出した遺構は土壤が殆どで、出土遺物は主に、弥生土器や須恵器、土師器を認めた。

以下、検出した遺構や遺物について報告する。

第2節 検出遺構

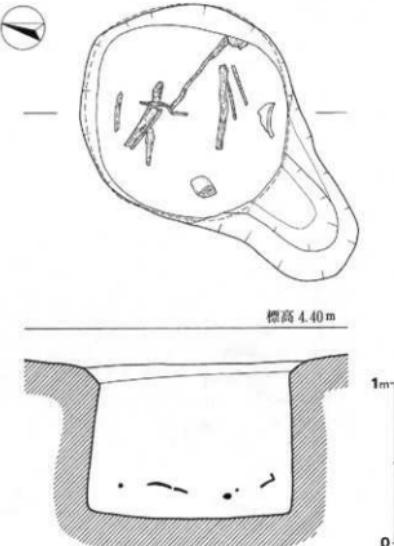
調査区から検出した遺構はかなりの削平を受けているため、主要な遺構のみを報告する。

SK 05（第14図・図版8-②・10）

調査区の南側で検出したほぼ円形の土壤で、SK 51を切っている。底部はやや袋状を呈していることから貯蔵穴を考える。埋土は暗黒色粘質土で、下層からは炭化層が確認され、瓦質土器、自然木（未加工）、河原石を出土している。このほか弥生土器、須恵器、土師器を認める。土壤内から出土した自然木や一部の土器は二次焼成を受け、自然木を利用して燃やしたと認識する。しかし、土壤内の焼壁は確認できなかつた。規模は直径138cm、深さ95cmを測り、底部はほぼ平坦である。

SK 08（第17図）

調査区の北側で検出した浅い土壤で、長径150cm、短径65cmを測る。黑色粘質土の堆積土。



第14図 SK 05 実測図 (1/30)

SK 10 (第 15・16 図・図版 9-①)

調査区のやや北よりで確認した楕円形の土壤で、淡黒茶色粘質土の埋土であった。規模は長径 150cm、短径 90cm、深さ 30cm を測る。出土遺物はない。

SK 13 (第 17 図)

調査区の北側で検出した土壤で、黒色粘質土の堆積土であった。長径 132cm、短径 90cm を測るもので、深さは 25cm 前後である。

SK 14 (第 17 図)

調査区北側に位置し、隅丸長方形状を呈する。黒色粘質土の埋土からなり、長径 157cm、短径 70cm、深さ 25cm 前後を測る。弥生土器、須恵器、土師器を僅かに出土した。

SK 20 (第 15・16 図・図版 9-②)

楕円形の土壤で、長径 200cm、短径 130cm、深さ 33cm を測る。黒茶色粘質土で、土師器の环をわずかに認める。

SK 23 (第 17 図)

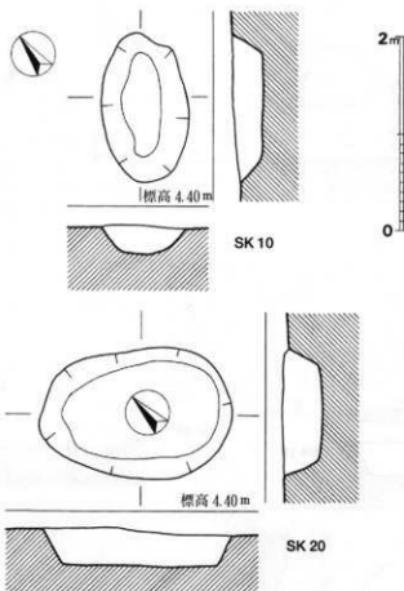
調査区の北よりに位置し、隅丸長方形状を呈する。黒色粘質土の埋土からなり、長径 245cm、短径 67cm、深さ 7~25cm を測る。

SK 28 (第 13 図)

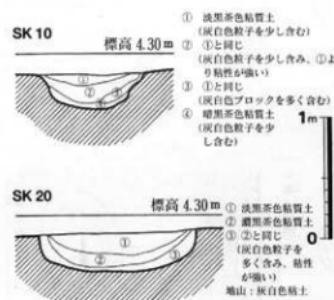
SK 20 の西で検出した楕円形の土壤で、長径 230cm、短径 80cm、深さ 3cm を測る。出土遺物はなし。

SK 30 (第 13 図)

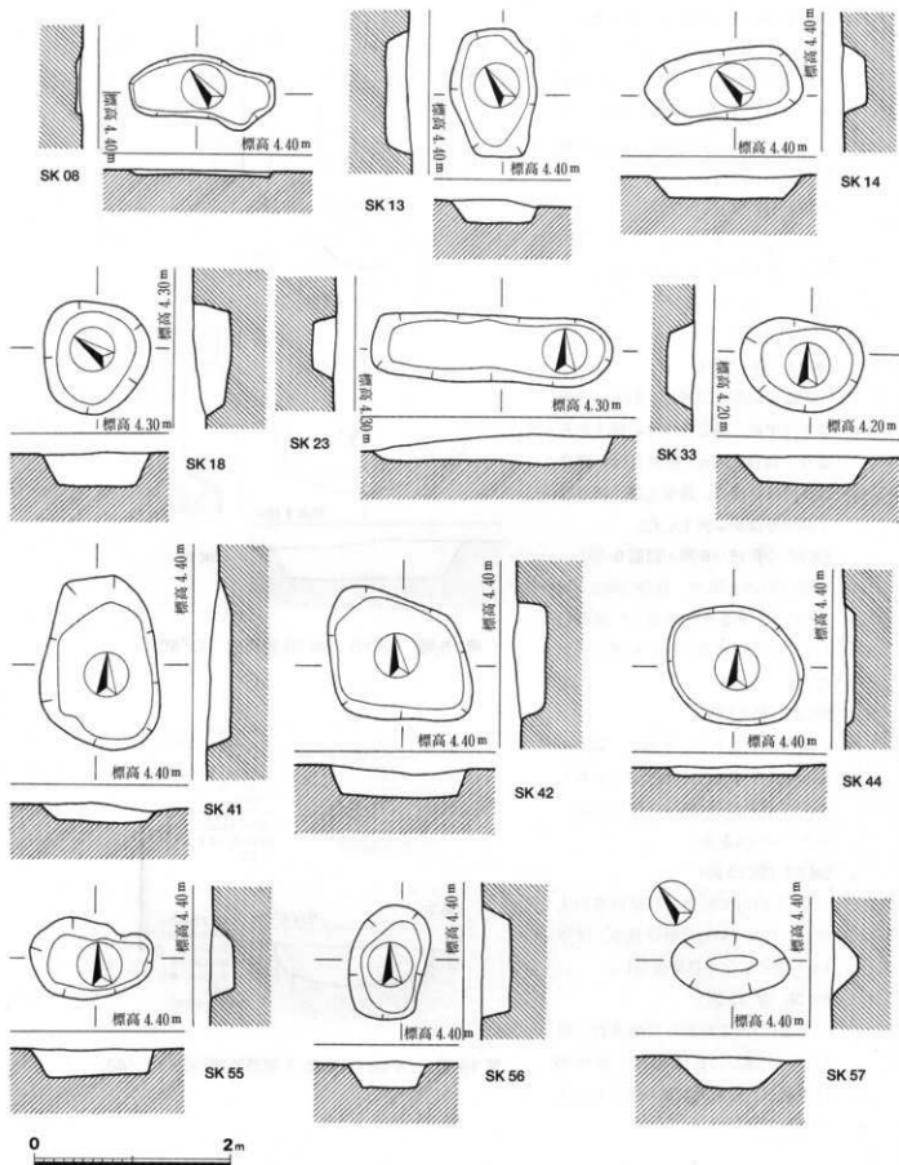
SK 20 の南で検出した隅丸長方形の浅い土壤で、長径 150cm、短径 90cm を測る。弥生土器甕の細片を出土している。



第 15 図 SK 10・SK 20 実測図 (1/50)



第 16 図 SK 10・SK 20 土層断面実測図 (1/40)



第17図 土壤実測図 (1/50)

SK 33 (第 17 図)

調査区のほぼ中央部に位置する梢円形状の土壤で、埋土は黒色粘質土である。長径 125cm、短径 90cmを測り、深さは 30cm前後を測る。

SK 41 (第 17 図)

調査区南側で検出した梢円形状の土壤で、長径 177cm、短径 117cm、深さ 7~15cmを測る。黒色粘質土の埋土。

SK 42 (第 17 図)

調査区の南側に位置する隅丸方形状の土壤で、黒色粘質土の堆積をなす。幅 110~140cmを測り、深さは 30cm前後を測る。弥生土器、土師器を僅かに出土した。

SK 44 (第 17 図)

調査区南側土壤群の一つで、黒色粘質土を埋土とする梢円形状の土壤である。幅は 124~150cmを測り、出土遺物は認めない。

SK 55 (第 17 図)

調査区南側で検出した不定形な土壤で、黒色粘質土を埋土とし、長径 125cm、短径 80cm、深さ 27cmを測る。出土遺物は土師器を僅かに認めた。

SK 56 (第 17 図、図版 10)

調査区南側に位置する土壤で梢円形状を呈する。黒色粘質土を埋土とし、一部に炭化物を含んでいた。長径 120cm、短径 75cm、深さ 25cm前後を測り、弥生土器、須恵器、土師器の他に、二次焼成を受けた河原石を認めた。

SK 57 (第 17 図)

調査区の最南端で検出した梢円形状の土壤で、断面は摺鉢状を呈する。黒色粘質土を埋土とし、長径 120cm、短径 67cm、深さ 33cmを測る。出土遺物は土師器、青磁を僅かに認めた。

第 3 節 出土遺物

SK 05 (第 18 図・図版 10)

弥生土器

甕 (7) 復原口径 31.0cmを測り、胎土は細砂粒を多く含む。口縁部は内外面ともにヨコナデで、体部外面は刷毛目、体部内面はナデの調整を施す。外面には二次焼成を受けたと思われる煤が厚く付着している。

瓦質土器

壺 (5) 復原口径 13.0cm、復原底径 7.6cm、器高 4.2cmを測る。胎土は精選され、色調は灰色を呈する。体部はほぼ直に立上がり、調整は体部外面にヨコナデ、底部内外面は不明である。

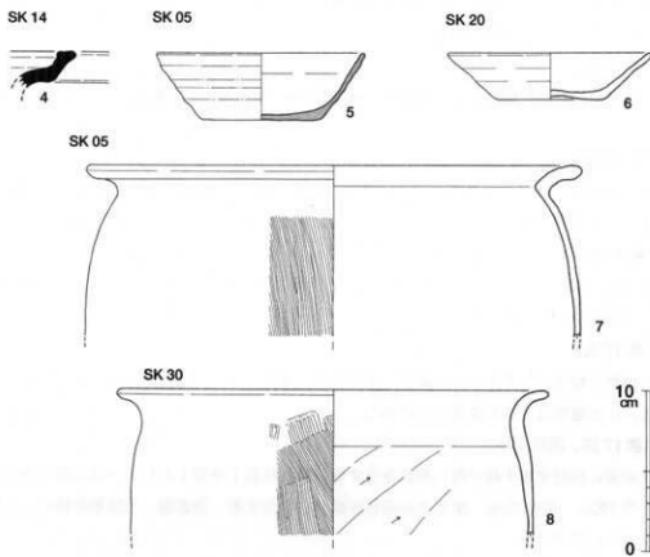
SK 14 (第 18 図)

須恵器

広口壺 (4) 内外面はヨコナデを施し、内面及び外面の一部に自然釉が見られる。色調は淡灰色で胎土は黑色粒子を多く含む。

SK 20 (第 18 図・図版 10)

土師器



第18図 土壌出土土器実測図 (1/50)

坏(6) 体部内外面はヨコナデを施すが、底部内外面は調整不明である。器厚は薄手で、体部はほぼまっすぐ立上がり、色調は淡赤褐色で、胎土は精選されている。復原口径12.8cm、復原底径7.0cm、器高2.9cmを測る。

SK 30 (第18図・図版10)

弥生土器

壺(8) 口縁部外面はヨコナデで、体部外面はヨコナデの後、刷毛目調整を施す。また、内面口縁部はヘラナデの後ヨコナデの調整を施し、体部内面にはヘラによる斜め方向の調整を施している。復原口径は27.0cmで、色調は灰褐色。口縁部及び体部の外面に黒斑が見られ、胎土は黒色粒子や細砂粒が多く含まれている。口縁部は緩やかに外反する。

第4節 小結

調査の結果検出した遺構はほとんどが著しく削平を受けており、このためか遺構からの出土遺物は乏しい状態であった。その中でもSK 05、SK 10、SK 20、SK 30は遺構の残りがよかつたようで、年代決定を促す遺物を出土しており、遺構の状況を鑑みることができた。

SK 05 は遺構の底部側面が若干袋状を呈することから貯蔵穴として利用されているらしく、貯蔵穴廃絶の後、廃棄土壌として活用しているようである。このことは下層から出土した土器や自然木、河原石が二次焼成を受けており、堆積土の下層に炭化物（木炭片）を確認することで示唆できる。SK 05 のすぐ南に位置する SK 56 はかなりの削平を受けていたものの、出土状況は相似しており、同様のことが考えられる。両者は埋没時期を概ね弥生時代後期と捉えるが若干下る可能性がある。SK 10、SK 20、SK 30 は自然堆積による埋没で下層から出土した遺物から、弥生時代後期に埋没時期を考える。このほかの土壌の時期については、先述したように年代決定に至る遺物が皆無の状態であるため、具体的な時期決定には至っていない。ただ、当遺跡の北部で調査した島田三反田遺跡とほぼ同じ規模の土壌が確認できることなどから弥生時代から中世に関連する遺構が点在しているのは明らかで、今後の調査が期待される。

（参考文献）

1. 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 一形式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料館研究論集 4』 1978 年
2. 鈴木道之助「図録 石器入門辞典 繩文」「柏書房」 1991 年
3. 久留米市教育委員会「安武地区遺跡群」「久留米市文化財報告書第 56 集」 1988 年

第 5 章　まとめ

筑後西部地区遺跡群が点在する筑後市南西部は標高 4~5m の低湿地帯で、縱横無尽に巡るクリークが数多くみられる田園地帯である。過去の分布調査や発掘調査において微妙に変化する地形に幾つかの遺跡が点在している状況を鑑みることができた。ただ、ほ場整備に伴い遺跡の分布を事前に確認するうえでは、ほ場整備工事区域があまりにも広範囲なうえ限られた調査期間によって、明らかに削平や掘削の及ぶ箇所に調査を限定せざるを得ない状況で、困難を招いている。ほ場整備に伴う発掘調査は今後平成 9 年度まで実施される予定で、できる限りの情報収集に努めたい。

最後に、発掘調査から報告書に至る間、多くの方々から有益な御教示、御指示を得ることができたが、その成果を充分に生かすことができなかつた点は否めない。また、各項においても充分な検討ができなかつた点についても深く反省しており、大方の厳しい御叱咤を賜わりたい。

なお調査及び整理に際しては、福岡県筑後川水系農地開発事務所・筑後西部地区土地改良区に御協力を頂き、次の方々に有意義な御指示・御教示を賜わった。記して感謝の意を表わしたい。

伊崎俊秋（福岡県教育厅南筑後教育事務所） 大石昇、近澤康治、富永直樹、白木守（久留米市教育委員会） 狹川真一、山村信榮（太宰府市教育委員会） 大塚恵治（八女市教育委員会） 柴田剛（財团法人君津郡市文化財センター）

図 版



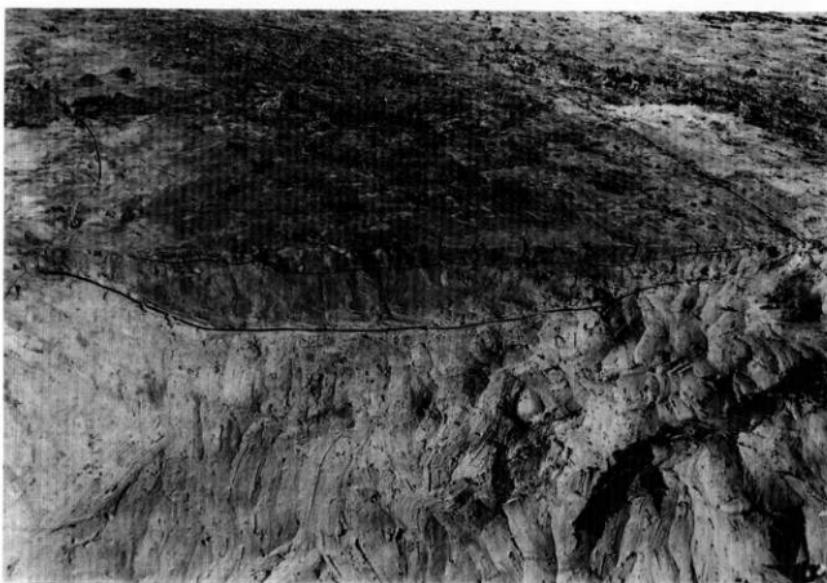
① 井田西中野遺跡全景（南から）



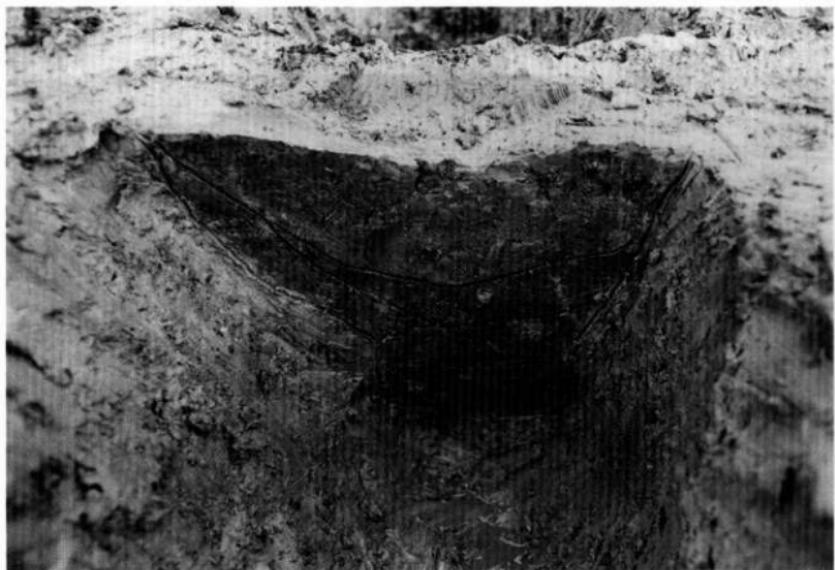
② 井田西中野遺跡全景（北から）



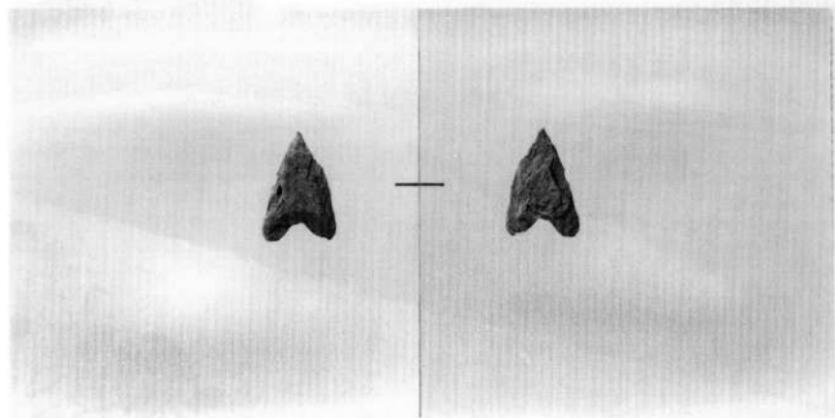
① 井田西中野遺跡SD1（東から）



② 井田西中野遺跡SD1土層断面（南から）

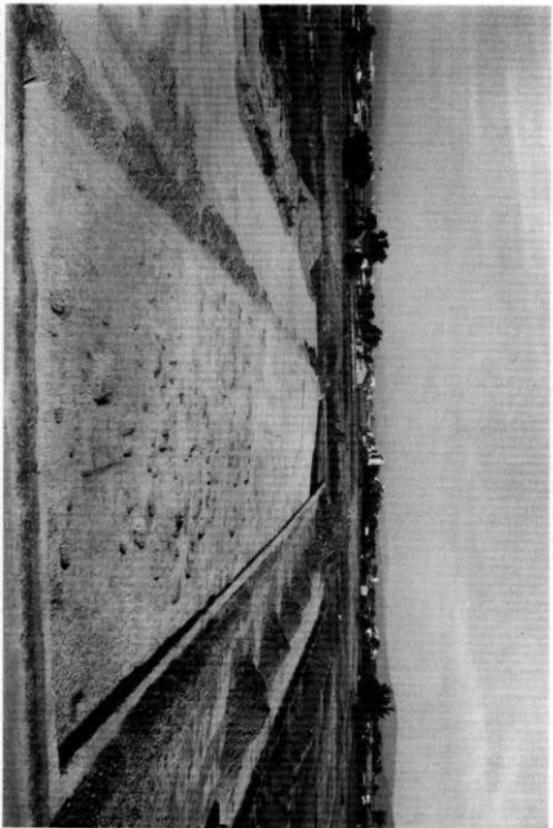


① 井田西中野遺跡SD2土層断面（南から）



② 井田西中野遺跡表土採集石錐

図版4



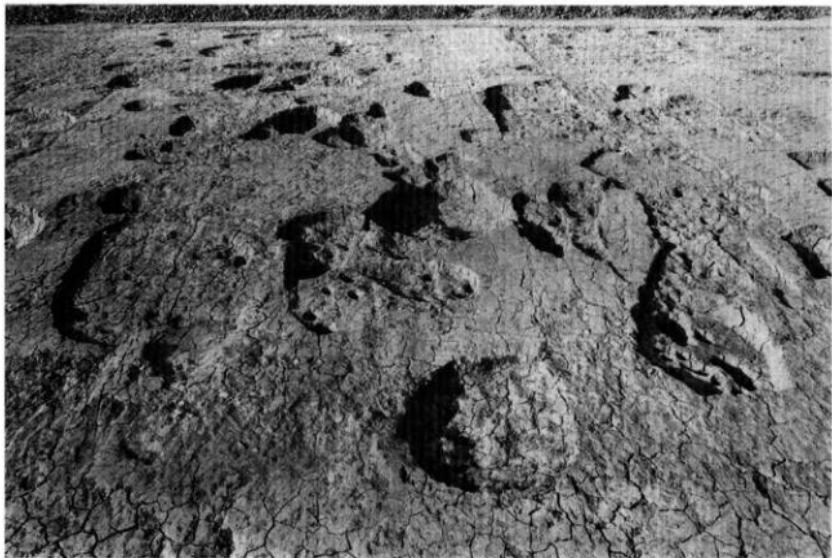
① 島田三反田漁港全景（西から）



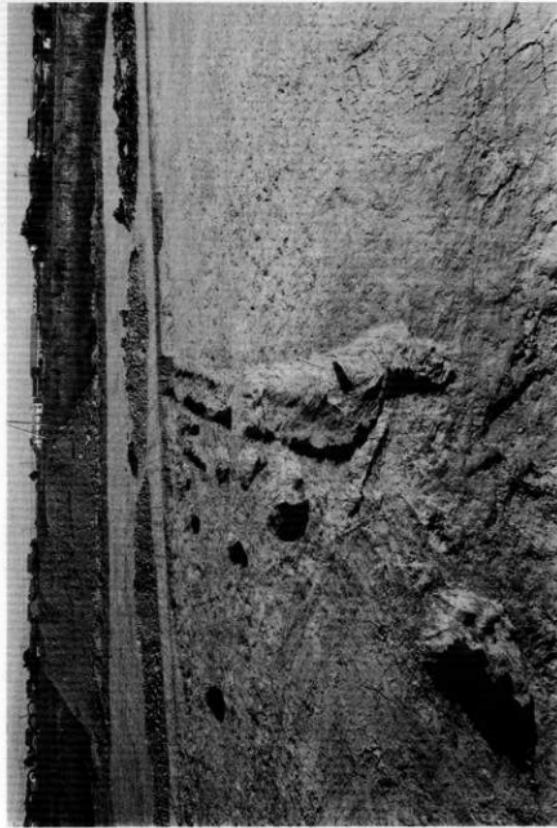
② 島田三反田漁港SD10（南西から）



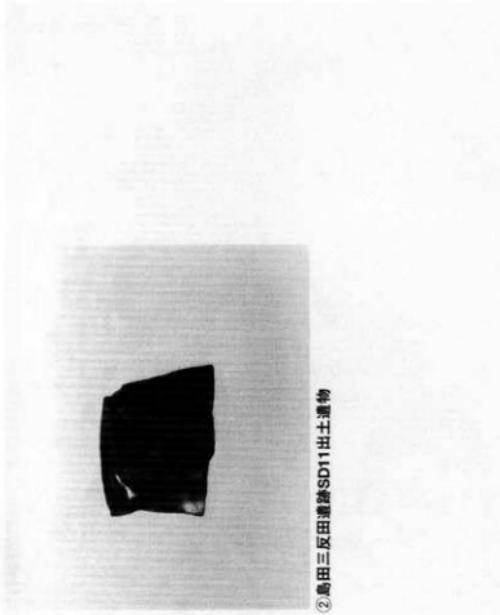
① 島田三反田遺跡土壤群（南から）



② 島田三反田遺跡土壤群（南から）



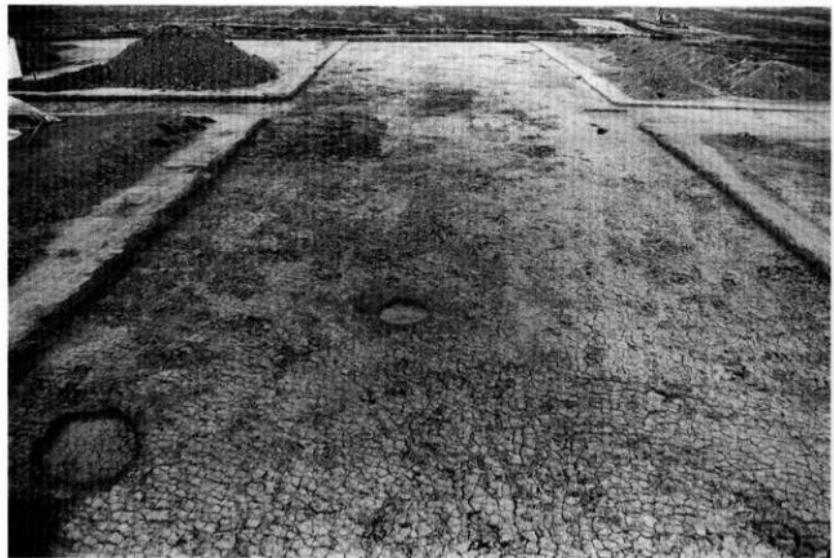
①島田三反田遺跡SD11（南から）



②島田三反田遺跡SD11出土遺物



① 古島島相遺跡調査区東部全景（西から）



② 古島島相遺跡調査区北部全景（南から）



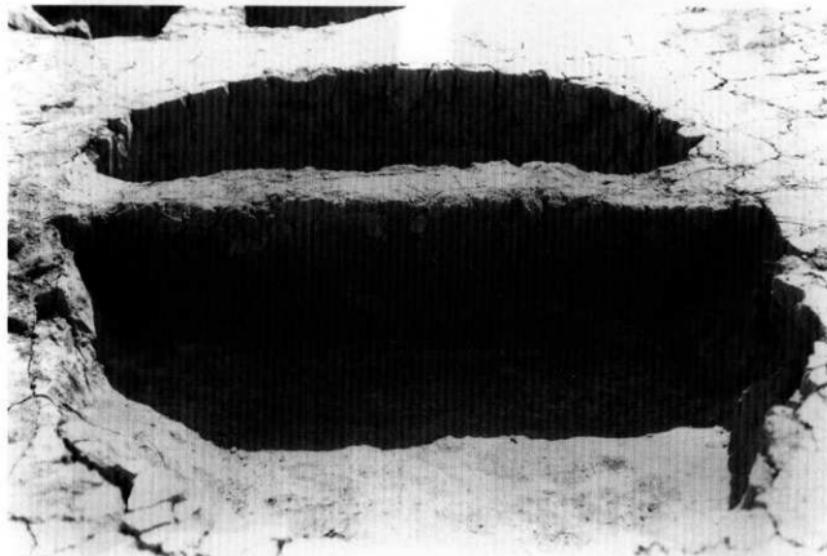
① 古島島相遺跡調査区南部全景（北から）



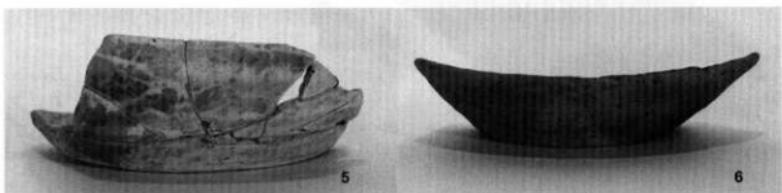
② 古島島相遺跡SK05遺物出土状況（北から）



① 古島島相遺跡SK10土層断面（南から）

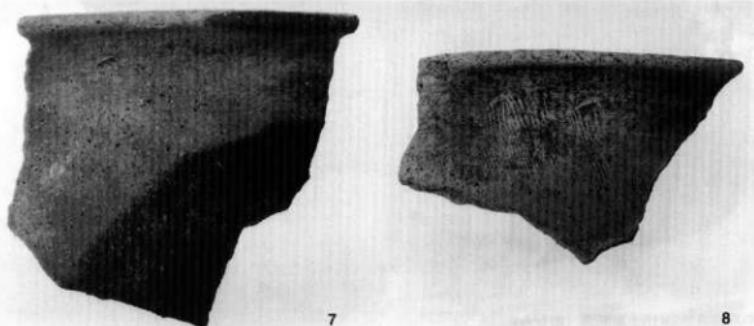


② 古島島相遺跡SK20土層断面（西から）



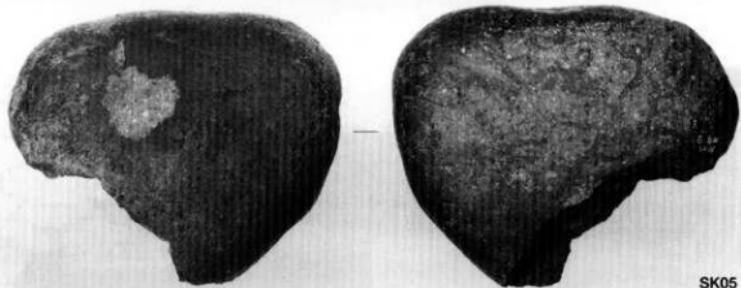
5

6

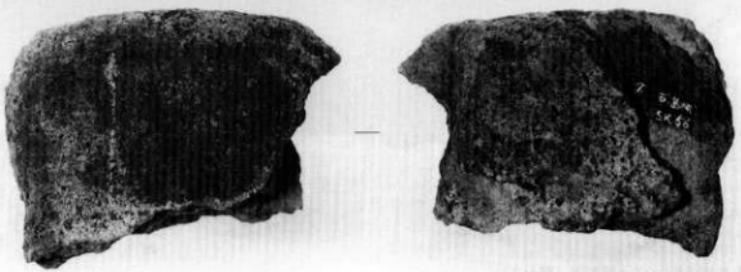


7

8



SK05



SK56

筑後西部地区遺跡群

筑後市文化財調査報告書 第15集

平成7年3月31日

発行 築後市教育委員会

筑後市大字山ノ井 898

印刷 リビガシ印刷

筑後市大字山ノ井 315-1